大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

平中物語第二段の和歌：歌物語の場面性など

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 賜鶴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005099

平中物語第二段の和歌

―歌物語の場面性など―

青木賜鶴子

はじめに

平中物語は、静嘉堂文庫本のみ現存する孤本であるが、その本文は少なからぬ校訂を必要とすることは、大方の認めるところであろう。本稿は、第二段終末近い一文に注目し、この一文は本来存在した一首の和歌が本文の乱れの結果分別できなくなってしまったのではないかということについて考察を加えたものである。

一　底本本文の現状

静嘉堂文庫本は鎌倉後期の書写とされるが[注1]、誤写が多く、一行約十八字で一面十一行書き、墨付六十丁半のうちに、明らかな誤写だけでも、およそ五十例見られる。推定される本文を（　）内に入れて例示すれば[注2]、

「ものいなむと（ものへいなむとカ）」（第一段、4ウ）

「つかさをめしをたに（「を」衍）」（第一段、4ウ）

「つれなりける（つれながりけるカ）」（第九段、17オ）

「ものさう〳〵さしくて（「さ」衍）」（第二十五段、32ウ）

などの一字の脱字・衍字がもっとも多いが、

「かゝるほゝに（かゝるほとに）」（第一段、4オ）

「しかま（しか寺）」（第七段、12オ）

のような字形が似ているゆえの誤写、

「たゝかりけるよ（たかゝりけるよ）」（第三段、10ウ）

「ひさうし（ひさしう）」（第十五段、21オ）

など前後の文字が入替ったもののほか、

「はかられにけにけり」（第二十九段、43ウ）

「よとゝもに思ひおもひもならぬ」（第十一段、18ウ）

「さてそのころさてそのころひさしくいかさりけれは」（第九段、17ウ）

のように、二～三字あるいはそれ以上の衍（傍線部）や、長いものでは、次のように二～三行にわたる場合もある（傍線部衍。改行は底本通り。鍵括弧で改丁を示す）。

といへりいたく人につゝむ人なりけれはわつら
はしとてをとこやみにけり又このおなしをとこ　」20オ
ともたちともあまたものしてひのくれにけ
れはわつらはしとておとこやみにけりまたこの

おなしをとこともたちともあまたものしてひ
のくれにけれはかへりくるにみちのほとに
（第十三～十四段、20オ～ウ）

「人につゝむ人なりけれは」「ひのくれにけれは」と「けれは」に目移りしたための衍であろうが、20丁オ最終行の「をとこ…又」と20丁ウ2行目の「おとこ…また」のように、重出部で用字が変わっているのを見ても、底本もしくはその親本の書写者は、さほど厳密には書写していないことが窺えよう。先にあげた第十一段の衍「思ひおもひも」も同様である。[注3]

二　第二段の問題点　付、和泉式部日記の場合

第二段は、伊勢集に同じエピソードがあることでも知られ、返事してくれない女に「たゞ見つとばかりはのたまへ」と言ったところ、その通り「見つ」と返されたやりとりなどは有名であろう。第二段の問題の箇所を、少し前の部分から引用する。[注4]

いつしかくれな、むとぞおもふといへるかへりごと、くるともなにのしるしもあるまじ、つねよりもこよひは宿直するものなどあれば、夜しも関守のまさるよし、いひたれば、をとこ、

あふさかの関は夜こそもりまされくるればなにをわれたのむらん

かへし女

もりませど夜はなほこそ頼まるれぬるまもあらばこさんと思ふに

といひつゝありふるに、かの男いといたううらみなどしければ、女いひたる、よし、なほおほかたにて見せむ、月おもしろきにといへば、きたり。すのこによびすゑて、はらからどもなどくちぐおかしくいひけるに、よし、これもて心ざしは見せんとて、などかゝる人めをいかでかはしのぶべきつゝむ事だになき身ならばこそあらめ

夜あけぬれば、男かへりていひおこせたり。

うちかはしちかはぬ袖をあまぐもとふりししぐれは月に見えけん

などぞいひたる。
（第二段、7ウ～8ウ）

「いつしかくれな、むとぞおもふ（早く日が暮れてほしいものだと思います）」は男の詞、「くるともなにのしるしもあるまじ…夜しも関守のまさる（日が暮れても何のかいもないでしょう、いつもより今夜は番人も増え、夜はことに警戒が厳しいのです）」は女の詞であろう。次の贈答は、

二人が逢えるという名の逢坂の関は、夜はいっそう関守が警戒を厳しくするとか、そうしたら日が暮れたといって私は何を期待すればよいのでしょう。

警戒が厳しくなるとは言っても、夜はやはり期待してしまうことです。もし関守が寝る隙でもあれば、その隙に逢坂の関を越えて逢いに来てくださると思うと。

といったところであろうか。男が日暮れを期待すると言えば夜は関守の警戒が厳しいと返す、それを恨めば、本当に私と会いたいなら関守が寝た隙をうかがって越えられるはずと返す、いかにも「見つ」と返した女らしく、男は翻弄され続けている。

そんな贈答を交わしつつ、恨む男に、「よし、なほおほかたにて見せむ、月おもしろきに」と女はいう。やって来た男を簀子に招いて座らせ、女の姉妹たちも一緒に、口々に気のきいた話などしている。「おほかたなり」は、取り立てて言うほどのこともない、一般的である、普通である、といった意味で用いられるから、「おほかた」の逢い方とは、女がしたように、皆と一緒に話

をする程度のことを意味するのであろう。

続く「よし、これもて心ざしは見せんとて、などか、る…ならばこそあらめ」の部分については諸説あるが、次の一文「夜あけぬれば…いひおこせたり」まで含めて、代表的な解釈二つをあげておく。

女は、「さあさ、これで私のあなたに対する気持ちはお分りでしょう。」といって、「今晩は人が多うございます。今晩あってはどうしてこの多い人目にかくれる事が出来ましょう。遠慮する事さえない身だったら、そりゃ大っ平であえもしましょうけど。お互の身ではね。とても今晩はあえませんわ。」と言った。夜があけたので男は家に帰って女にこう言いおくったのだった。（目加田さくを氏）[注5]

よろしいわ、今夜お目にかかることでもって、私の実のあるところをお見せしましょうといっておきながら、なんでこんなに大勢の人目があるのか、こんなことではどうして目立たぬように思いを交せよう、恋せぬ身ならば大勢もおもしろかろうが、これではとてもだめだと思って、夜が明けたので、男は帰って歌をよこした。（清水好子氏）[注6]

前者は「よし、これもて心ざしは見せん」を女の言葉とし、続けて「などか、る…ならばこそあらめ」と言ったと解する説、後者は「よし、これもて…」は女の言葉を思い出す男の心中、「などか、る…」も男の心内語と解する説である。「よし、これもて…」を男の言葉とする宮田和一郎氏、全体を男の心中とする秋山虔氏のほかは、後者と同様の解釈が多く、後者がほぼ通説となっている。[注7]

問題にしたいのは、「などか、る…ならばこそあらめ」と、次の一文「夜あけぬれば…」の続き具合である。この部分が言葉または心情であるなら、なぜ「…といふ」「…と思ふ」などと、それを承ける表現がないのだろう。何の説明もなく突然「夜あけぬれば…」と次の話題に移ってしまうのは、いかにも不自然である。目加田氏、清水氏も、その不自然さを解消するため「と言った」「これではとてもだめだと思って」と言葉を補っておられるが、言葉を補わずに解釈できないものだろうか。

「などか、る…ならばこそあらめ」の部分は、本来は一首の和歌だったのではないだろうか。和歌であれば、突然次の話題に移ったり、場面転換することが有り得るのではないか。

なお静嘉堂文庫本は、和歌は約二字分下げて二行書きにしているが、もう一度この前後の部分を底本の改行通りに示せば、

けるによしこれもて心ざしは見せんとて
などか、る人めをいかでかはしのぶべき
つ、む事だになき身ならばこそあら
め夜あけぬれはおとこかへりていひおこ
せたり

となっており、「などか、る…」の部分は二字下げではないが、まったく痕跡がないともいえない。底本本文の現状を思えば、もとは一首の和歌であった可能性も考えてよいのではなかろうか。

同様の例として、和泉式部日記がある。三条西家本によって底本の改行通りに示す。[注8]

秋のうちはくちはてぬべしことはりの
しぐれにたれか袖はからまし
なげかしとおもへどしる人もなし。草の色
さへみしにもあらずなりゆけば、しぐれん
ほどのひさしさもまだきにおぼゆる風

に心ぐるしげにうちなびきたるには
たゞいまもきえぬべき露のわが身ぞ
あやうく草葉につけてかなしきま、
に、おくへもいらでやがてはしにふしたれば
つゆねらるべくもあらず。…（以下略）　（26オ～ウ）

ここは帥宮との五首贈答であるのに女の歌が四首しかなく、帥宮の返歌は女の歌の初句をそのまま用いるのを趣向としていることから、帥宮歌「きえぬべき露のいのちと思はずはひさしききくにかゝりやはせぬ」に対応する「消えぬべき」で始まる女の歌が存在したと推定される。さらに和泉式部集では、前掲「秋のうちは…」の歌が正集八八五番にあり、その次に、[注9]

きえぬべき露の我が身はもののみぞあゆふくさばに悲しかりける

の一首があることから、「きえぬべき露のわが身ぞあやうく草葉につけてかなしきま、に…」は、本来は一首の和歌であったものが、書写の過程で地の文と見分けがつかなくなった結果、現在のような形になったと推測されている。一首の和歌の形になっている現存伝本はないから、おそらくかなり早い段階でそうなったのであろう。平中物語の場合も、同様の事情が考えられるのではないだろうか。

三　歌物語の場面性から

和歌であれば、次の話題に移ったり場面転換する場合に「…といふ」などの表現を必ずしも必要としないものかどうか、次に確認しておく。

平中物語に影響を与えた伊勢物語中には和歌二〇八首、短連歌一組（全二一〇例）があるが、そのおよそ半数は、前の和歌を承けているのが明らかな「と言ふ」「など言ふ」「かく言ふ」「と詠む」「と書く」「ときこゆ」「と泣く」「と思ふ」「とあり」「とて」「となむ」のほか、「返し」またはそれに準ずる表現が和歌の後にある。一方、和歌で終わる章段が六五章段（六五首）あり、これは全一二五章段のうちの約半分である。

和歌の後で場面転換する場合は、[注10]

京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。
するがなるうつの山べのうつゝにもゆめにも人にあはぬなりけり
ふじの山を見れば、さ月のつごもりに雪いとしろうふれり。
時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらにゆきのふるらん
（伊勢物語・第九段）

ひとゝせにひとたびきます君まてばやどかす人もあらじとぞ思
かへりて宮にいらせ給ぬ。夜ふくるまでさけのみ物がたりして、…
（伊勢物語・第八十二段）

などがある。第九段は「駿河なる」の歌の後、「富士の山を見れば…」と話題が転換し、第八十二段の場合も、「ひととせに」の歌の後、「帰りて宮に…」と場面転換する。和歌であるゆえに、すぐに話題が転換しても不自然ではないのである。

平中物語中の和歌一五一首、短連歌二組（全一五五例）については、およそ八割の和歌の後に、「と言ふ」「など（ぞ）言ふ」「とあり」「かく言ふ」「かく詠む」「かう詠む」「さ言ふ」「と詠む」「と書く」「と答ふ」「と」「とぞ」「となむ」「とて」「返し」またはそれに準ずる表現がある。

和歌で終る章段は七章段、和歌の後で場面転換するものは、

まつほどにきみかへりこで猿沢の池のこゝろをのちにうらむな
みないでたちて馬にのるに、この男くるしうなりて、かういへるとて、

げにたちかへり来ぬべきことをやいはましと思へど、…

（第二十六段、57ウ）

よをわぶる涙ながれてはやくともあまのがはにはさやはなるべき

夜さりいきてみるに、いとまが〳〵しくなむ。（第三十八段、60オ）

などである。第三十六段は「まつほどに」の歌の後、「みないでたちて馬にのるに…」と場面が転換し、第三八段も、「よをわぶる」の歌の後「夜さりいきてみるに…」と、やはり場面転換している。

付言するなら、伊勢物語のうち約半数の六五章段、平中物語の七章段が和歌で終わり、「昔、男…」「又、男…」などと次の章段が語られても違和感がないのは、和歌でその場面（段）が完結しているから、という見方もできるだろう。そもそも歌物語とは、和歌を中心とする物語であるが、一首の和歌を中心に構成された場面（段）の集合体ともいえるのである。

第二段終末近い「などかゝる…ならばこそあらめ」が本来一首の和歌であったとすれば、次の一文「夜あけぬれば…」で突然話題が転換しても不自然ではないことは、このように、歌物語の場面性の観点からも確認できるだろう。

四　解釈の検討

次に、問題の部分についての従来の解釈を検討しておく。

まず「などかゝる人めをいかでかはしのぶべきつゝむ事だになき身ならばこそあらめ」は、誰の言葉または心情なのだろうか。女の言葉と解するなら、姉妹たちを同席させておきながら、「ほら、このように人目がありますから…」と断ったことになるが、人目を気にするなら、はじめから同席しないよう配慮すればよいのだし、女はもともと「おほかた」の逢い方であればと条件をつけた上で簀子に招いているのだから、やはり、この部分は、男の言葉または心情を言ったものと考えるのが妥当であろう。[注11]

しかし、「よし、これもて心ざしは見せんとて」まで含めて男の心中語と解するのはいかがであろうか。清水氏は前掲のように「今夜お目にかかることでもって、私の実のあるところをお見せしましょうといっておきながら」と訳し、「これもて」は「今夜の対面で、の意」（頭注）とされている。従来の多くの説も同様であるが、「これ」は何か言葉なり態度なりを指すのが普通であろうし、文脈からも、後に続く「などかかる…」を指すと見るのが自然であろう。また、女ははじめから「おほかたにて見せむ」と言っていたのであって、「心ざし」「私の実のあるところ」を見せよう、と言ったのではない。

したがって、男が「よし、これもて心ざしは見せん」と言い、みずからの「心ざし」をあらわそうとして「などかゝる人めをいかでかはしのぶべきつゝむ事だになき身ならばこそあらめ」と嘆いた、と考える。この嘆きはもと一首の和歌であったかと考えられることは前述の通りである。

女は、「おほかた」の逢い方ならばと、男を月見に招いたのだが、男の側にすれば、ともかくも女からの初めての招きとあって、それだけで浮き浮きとやって来たにちがいない。内心では以前女に言われたように関守が寝た隙にと期待していたかもしれない。しかし実際には大ぜいが一緒で、二人きりの逢瀬など望むべくもない。期待した分失望も大きく、これほど人目があっては…と嘆いたのである。

また、従来は「つつむ」は「恋心を隠す」の意とし、前掲した清水氏のように「恋せぬ身ならば」などと解釈されてきた。たしかに、[注12]

つつめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

（後撰集・夏・二〇九・読人不知　大和物語・第四〇段）

のように、恋心をつつみ隠す、表面にあらわさない、の意で「つつむ」を用いた例があるが、だとすれば、「つつむことだになき身」は、「恋せぬ身」ではなく、恋心を隠すことのない身、隠さないでよい身、といった意味になるはずである。その「恋心をつつみ隠す」にも広い意味では通じるのだが、ここは、「人目」を「つつむ」、つまり親きょうだいなどの「人目を憚る」の意とするのが妥当なのではないだろうか。

平中物語における「つつむ」の用例を見ると、物を包む、の意のほかは、

女見にはみて、つゝむ人などやありけん、たゞ、暮れなば、かしこにをといひて、いにけり。　…（中略）…　いたく人につゝむ人なりければ、わづらはしとて、をとこやみにけり。　（第十三段、20オ）

女も親につゝみければ、さてやみぬ。　（第二十四段、31オ～ウ）

さては長居してすこしもこそ遅るれと、親のこゝろをよにしらずつゝみければ、え行かで、かゝる事をいひやる。　（第三十六段、57ウ）

のように、親などに遠慮する、の意味で用いられている。他作品でも、

昔いとわかきをとこ、わかき女をあひいへりけり。おの〳〵、親ありければ、つゝみて、いひさしてやみにけり。　（伊勢物語・第八十六段）

おもへども人めづつみのたかければ河と見ながらえこそわたらね

（古今集・恋三・六五九・読人不知）

たきつせのはやき心をなにしかも人めづつみのせきとどむらむ

（同・六六〇・読人不知）

など、同趣の例はいくらも見出すことができる。

続く場面は、

夜あけぬれば、男かへりていひおこせたり。

うちかはしちかはぬ袖をあまぐもとふりししぐれは月に見えけん

などぞいひたる。

である。女の家でも、これほど人目があっては…と嘆いた男であるが、女や姉妹たちと一緒に月を見ながら話すうち、いっこうに進展がないまま帰らねばならなかった嘆きはさらに深い。折しもさっと時雨が降ったのであろう、あの時雨は私の涙だったのですよと、逢瀬ともいえない逢瀬のあとの後朝の歌をおくったのである。

この部分の解釈はおおよそ次のようになるだろう。

「それでは、これでもって私の心ざしをお見せしましょう」といって、（男は歌を詠んだ）、

どうしてこのような人目のある場所で、隠れてあなたにお逢いすることができましょう。人目を憚らなくてよければと思いますが…。

夜が明けたので、帰った男は歌を贈ってきた。

袖うち交わし共寝をして固く約束してくださらないゆえに、私の袖は涙でひどく濡れてまるで雨雲のようになりました。その雨雲が降らせた時雨を、あなたも月の光でご覧になったでしょう。

などと言ったのである。

むすび

最後に、もとの和歌はどのようなものであったのか、憶測を述べるなら、たとえば次のような形だったのではないだろうか。

などかかる人目をいかでしのぶべき

つつむことなき身ならばこそあらめ

「いかてかは」「つつむことたになき」は、仮に「いかて」「つつむことなき」と考えてみた。第一章で示したように、「はかられにけにけり」「思ひおもひもならぬ」など二字三字の衍もあることを思うと、あるいは「いかてかて」などを経て「天」の草体と「者」の草体が見誤られ、「いかてかは」と誤写された可能性があるかもしれない。同様に、「つつむことたになき」は、「つつむことことなき」などを経て「こと」が「たに（字源「多尓」）」と見まがえられ、「つつむことたになき」と誤写された可能性があるかもしれない。

ただし第五句は「身ならばこそあらめ」と九文字になってしまう。九文字であったゆえに書写の過程で和歌と認識されなかった可能性があるかもしれず、他にもさまざまな可能性が考えられるが[注13]、推定本文については、あくまでも憶測として述べるにとどめておきたい。

以上述べてきたように、第二段終末近い一文の落ち着きの悪さは、それがもと一首の和歌であり、書写の過程で地の文と見分けがつかなくなってしまった結果と推測する。もちろんそのような本文を持つ伝本が発見されない限り推測の域を出ることはないが、平中物語のように信頼できる古い写本が存在しない場合は、古い段階の写本の姿を想像しながらの慎重かつ思い切った解釈も必要ではないかと考えている。大方のご批正を乞いたい。

（注）

1　題箋に「冷泉為相卿筆」とあり、為相真筆ではないが、為相の時代、鎌倉時代後期の書写とされている。

2　以下、平中物語の引用は目加田さくを氏編『平仲物語』（一九五七年、武蔵野書院刊）の影印により、章段番号と底本の丁数を示す。章段番号は現在一般的な区切り方による（萩谷朴氏、岩波書店日本古典文学大系等。章段の区切り方については諸説あり、目加田氏は第七段を二章段に分け、後半部を第八段とするため章段数がひとつ多い）。

3　このほか、「このおとこいひすさひにけるに□□□なりにけり」（第十三段、19ウ）、「とい□（は）せたれは」（第十三段、20オ）など磨滅により判読できない文字がある。

4　引用にあたっては適宜濁点・句読点を施し、一部を漢字表記に改め、最小限の校訂を加えた。本文を改める場合は底本の本文を右に傍記した。以下同じ。

5　目加田さくを氏『平仲物語新講』（一九五八年、武蔵野書院）。講談社学術文庫『平仲物語 全訳注』（一九七九年、講談社）の目加田氏訳注も同様。

6　新編日本古典文学全集12『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』（一九九四年、小学館）。以下引用する清水好子氏の説はすべて同書による。

7　宮田和一郎氏「対訳平仲物語（二）」（『平安文学研究』一六号、一九五四年七月）は、頭注で「よしこれもて―以下誤脱あるか」とし、「男は、「ままよ、これで私の愛情のほどを示さう」といつて、何で人目などを憚ることがあるものか、遠慮する事もない身ならばとにかく。」と訳す。宮田氏校註『王朝三日記新釈　篁日記・平中日記・成尋母日記』（一九四八年、健文社。一九五六年版による）も同様。

秋山虔氏の説は現代語訳日本古典文学全集『更級日記 平中物語 篁物語 堤中納言物語』（平中物語は秋山虔氏訳、一九五四年、河出書房）による。以下に訳文を引用する。「こんなぐあいでは、女に意中を伝えよう

たって無理なはなし、この大ぜいのひと目をごまかすことなんかできはしないのです。」

日本古典全書『平中物語・和泉式部日記・篁物語』（山岸徳平氏校注、一九五九年、朝日新聞社）、萩谷朴氏『平中全講』（一九五九年初版、一九八七年復刊、同朋社）、萩谷氏『平中物語―附平中滑稽譚―』（一九六〇年、角川文庫）、日本古典文學大系77『篁物語　平中物語　濱松中納言物語』（平中物語は遠藤嘉基氏校注、一九六四年、岩波書店）、中田武司氏『平仲物語』（一九七七年、桜楓社）、森本茂氏『平中物語全釈』（一九九六年、大学堂書店）等は清水氏と同様の見解のようである。

8 和泉式部日記の引用は『和泉式部日記 宮内庁書陵部蔵 伝三条西実隆筆』（藤岡忠美氏編、一九八五年、和泉書院）所収の影印により、適宜濁点・句読点を施した。以下同じ。

9 和泉式部集の引用は『榊原本私家集』（一九七八年、貴重本刊行会）所収の影印により、適宜濁点を施した。歌番号は『新編国歌大観』による。

10 伊勢物語の引用は『御所本 伊勢物語 宮内庁書陵部蔵 冷泉為和筆』（鈴木知太郎氏編、一九八一年、笠間書院）所収の天福本の影印により、適宜濁点・句読点を施し、最小限の校訂を加えた。本文を改める場合は底本の本文を右に傍記した。以下同じ。

11 『王朝歌物語選』（徳原茂実と共編、一九九三年、和泉書院）においては女の詞と考えていたが、訂正したい。

12 勅撰集の引用は『新編国歌大観』による。以下同じ。

13 本稿の趣旨は和歌文学会関西例会（一九九〇年四月、於甲南女子大学）における口頭発表「平中物語の贈答歌」の中で触れ、『王朝歌物語選』（注11参照）頭注にも示したが、下句以下は「つつむことだになき身なりせば　とあり」であったかと考えていた。

（あおき　しづこ・本学助教授）